社会学覚書

李　剣　華 著
星　　明 訳

〔訳者まえがき〕

この翻訳は，中国社会学研究会の学会誌『社会学通訊』(1)（1982 年，第 3 期）に掲載された李剣華（1900 ～ 1993）の「社会学随笔」（社会学覚書）を全訳したものである。ただし，うえの『社会学通訊』ではレーニンおよびマルクスの社会科学ないしブルジョア科学についての考え方やそれらの利用に基づいて康生(2)を批判した李の論述 1 か所，毛沢東の社会調査についての考え方に基づいて康生を批判した李の論述 1 か所，康生による費孝通と李景漢批判に対する李の反批判 2 か所の合計 4 か所，53 行が削除されているので，その部分を『李剣華先生紀念集』（1995）所収の「社会学随笔」(3)から訳出して，補足し原作に戻した。

この覚書は，李が 82 歳の時のものであり，その内容はかれが 1921 年に日本へ留学した 21 歳から，執筆時までの約 60 年間に自分が直接かかわったできごと，すなわち日本留学時の状況，国民党と共産党の闘争，共産党の秘密党員として活動，民国期の教員生活，社会学と社会学者との交流，東南社会学会の創設への参加，新中国樹立後および反右派闘争期，文革期の社会学と社会学者の運命，社会学の回復後の社会学の情況など，そしてそれぞれのできごとについての胸中が時系列でまとめられている。

李は 1921（大正 10）年という早い時期に日本大学に留学し，社会学を学び，1925 年に卒業した。同年，帰国と同時に上海の大学で社会学を講じた社会学者である。その著作には『労働問題与労働法』（1928），『犯罪学』（1932），『社会学史綱』（1930），『社会事業』（1931），『労工法論』（1911），『監獄学』（1936），『犯罪社会学』（1937），『非常時期之社会政策』（1937），『社会思想史』（潘大道，李剣華講述，1958），『社会学簡明辞典』（李剣華，範定九編，1984），『社会学概論』（出版年，出版社不詳）などがある(4)。

かつて，訳者が佛教大学の海外研修制度を利用して 1991 年 4 月から 1992 年 3 月まで，上海社会科学院社会学研究所に訪問学者として滞在した時，李剣華先生は同院顧問であった。当時の社会学研究所所長丁水木先生，同所秘書長呉書松先生(5)，同院外事処の副処長周益政先生をとおして，なんども当時 91 歳の李剣華先生との面会の

希望をだしたが，そのたびに「もう日本語を忘れている」，「もう高齢で話すことができない」といわれ，ついにお目にかかることができなかった。李先生はうえにあげた社会学史の著作もあるのでぜひともお会いしたかったが，いまも心残りのままである。昨年（2016年），陳樹徳の論文「中国社会学的歴史反思」(6)（中国社会学の歴史的再認識）を読んでいる時に，幸いにここで翻訳した李先生の覚書が引用されていることを発見し，その脚注には「引自李剣華「社会学随笔」一文，載『社会学通訊』，中国社会科学院社会学研究所内部出版」と記載されていた。内部出版のため「中国知網」（China Knowledge Resource Integrated Database, www.cnki.net）にも書誌はなかったが，2016年12月26日に上海図書館で『社会学通訊』（1992年～1994年）をコピーすることができた。その1982年第3期にこの李剣華の「社会学随笔」があることを確認した次第である。

われわれはこの訳稿から，社会学をまったく知らなかった一人の青年が，社会学を学び，そして社会学の教育と研究を職業にし，次第に共産主義思想を深化させ，その思想を流布させ，そしてそれゆえに国民党によって1933年12月に投獄され，1934年3月の保釈後に中国共産党に加入し，「三反運動」(7)のなかで1952年5月に党籍を剥奪され，1980年，80歳で名誉回復したという，一人の青年，知識人の意識変容，ライフヒストリーをみると同時に，それらをとおして中国社会の変容をもみることができる。一人の中国人社会学者の現実の生の生きざまと社会や学問とのかかわりの実際をみることができる。

（一）

わたしは，1921年に四川から日本の東京に留学した(8)。

当時，東京の公立，私立大学のなかで，社会科があったのは日本大学だけであった(9)（ママ）。

わたしは，当時まったく社会学とはなにかがわからなかったが，ただこの学問はとても流行しているような気がして，それで日本大学社会科に入学した。これが，わたしが社会学と関係をもった最初である。

当時，日本の社会学は主として理論社会学を重視しており，数年学んで，頭のなかは多くの社会学者の理論でいっぱいになった。たとえば，ギディンズの「同類意識」説，タルドの「模倣」説，ジンメルの「社会関係」説などなどである。そのうえ，社会学は社会主義を説明するものではなく，社会運動とは無関係であるし，しかも社会学は超階級的で党派に属さない科学であるとあたう限り言明されていた。

したがって，革命の先駆者孫中山先生が陳炯明の裏切りによって余儀なく日本の神戸に来

た時，ともに東京に留学している国民党の学生が，神戸に行き孫中山先生を歓迎しようとわたしを誘った。わたしは「自分は国民党員でも，共産党員でもない」といい，婉曲に断った。その国民党の学生たちは神戸に行き，孫中山先生と一緒に写真を撮ったが，わたしは孫中山先生と会う機会を失った。これは一生心残りである。

東京で，わたしも堺利彦が書いた『社会主義とは何か』（何謂社会主義）（『社会主義学説の大要』(10)か：訳者）という小冊子を読んだが，社会主義について，依然としてどうも理解できなかった(11)。

1925 年，東京で壮大な孫中山先生の追悼大会が開催され，日本の首相犬養毅やそのほか政界人および有名人である大山満らも出席した。わたしは当時，自ら哀悼の対句を書いた。次のように覚えている。

心存漢室, 名冠党碑, 听娓娓遺言、無限凄涼無限恨。

中薬無霊魂、西医罔効、嘆労労尽瘁、有人歓喜有人哀。

孫中山は生涯中華に尽力し，国民党の歴史に名を残す。気持ちを込めてねんごろに話してくれた遺言を聞いて，心のなかに無限の寂しさと無限の恨みを感じる。

かれの病気には漢方薬も，西洋医学も役立たなかった。国のために一生を尽くした彼の逝去を喜ぶひとがいれば，哀しむひともいる社会の現実を身にしみて感じる。

「喜ぶひとがいれば，哀しむひともいる」という一句から，わたしはだんだんとぼんやりとした階級に目覚めていたことがわかる。

（二）

1925 年の後半年に，上海中華学芸社が創立した学芸大学から電報で招きを受け，帰国してこの大学の社会学の講座を担当したが，わたしは軍閥の混戦が止まないことを心底憎んでいたので，四川に帰って軍閥にちょっとした官職を求めることも断固としてしなかった(12)。わたしは喜んで学芸大学の招きに応じて，日本から帰国した。これが，わたしが社会学の教育に携わった人生の第一歩である。

当時，郭沫若がこの大学の文学部主任であった。郭沫若のところで，漆樹芬，蔣光赤（後に，蔣光慈と呼ばれた）をみたことがある。国家主義派の首領の曽琦もこの大学で講義をしており，曽琦は常に郭沫若と火花を散らしていた。曽琦は国家主義的な『醒獅』という機関誌を発行していたし，郭沫若も『洪水』という刊行物の編集長であった。

わたしは，社会学は超階級的で無党派の科学であるという考えに固執していたので，郭沫若や曽琦が，わたしに文章を書くよう声をかけてきた時は，すべて引き受けた。わたしは『醒獅』に発表したものが比較的多く，『洪水』に発表したものは比較的少ない。『洪水』に書いたものでは『評易家鍼社会学史綱要』(13)（ママ）のほか，その他のものも大局とはかかわりの

ない文章である。『醒獅』にわたしが発表したものは，日本大学の卒業論文『中国国民性論』を数回，連載したものであり，その他のものはただ朱舜水を紹介した文章を少し書いただけであり，これもまた大局とはかかわりがないものである。その時，わたしの思想は共産主義に反対するものでもなければ，国家主義に反対するものでもなかったが，しかし一種強烈な愛国主義思想をもっていた。これは，わたしがかつて『中国国民性論』の序言で「不見廬山真面目，只縁身在此山中」（「廬山の真面目がわからないのは，ただただ我が身がこの山のなかにあるためだ」（きわめて複雑雄大で計り知れない真相のたとえ。また，真相を知るには局外から客観視する必要があるという意），「わたしは祖国を離れてすでに数年が過ぎた，昼夜，雨風を問わず，祖国を思わない日は一日もない，寝食をかえりみず，たえず祖国のことを思う」と書いたことからわかる。要するに，意味のあらましは，わたしは外国にあり，祖国の本当の姿について，比較的はっきりとみることができるということである。実際，いまみたところでは国民性という命題は科学的なものではない。

わたしは学芸大学を離れた後，上海法科大学の副学長（学長は董康）であった潘大道先生に招聘されて，社会学と労働問題，労働法の講義をした。当時は，規模が雄大で勢いのすさまじい第一次大革命期であり(14)，これがわたしの思想に影響しないわけがない。たとえば，わたしは労働組合問題に言及した時，「現在，われわれ中国の労働組合運動は，日々発展しているとはいえ，発展の途上にあり，まだ多くの困難がある」と話した。わたしは4種類の困難をあげた後に「わたしたちはこの四つの難関を粉砕しなければならない，まず帝国資本主義の抑圧から解放されて，われわれの独立自主の国家を建設しなければならない。時代錯誤の封建的な軍閥から解放されて，われわれの民主政治の国家を完成させなければならない」と話した。

日本大学を比較的早期に卒業した，わたしの同窓の日本の社会学者浅野研真(15)が拙著『労働問題と労働法』のために序文を書いた。そのなかで「比較的よい労働法をつくることは，比較的よい労働運動が進んでこそ可能であり，そして労働運動の比較的よい進展は，また比較的よい労働法をつくることを背景としなければならない。すなわち，労働法はいままでの権力者の考えたとおりに根拠もなくでたらめに書き綴ることができない。いかにあろうとも，労働法は民衆自身の力によって獲得するものでなければならない。おおよそ容易に手に入れたものは，運用しにくいばかりでなく，失いやすくなる」と書いてある。また「現在の中国は，わたしは二重の困難があると考える。一つは欧米や日本の高度資本主義の外部からの搾取があることであり，もう一つは国内の労資の階級闘争である。したがって，中国のプロレタリアートは，二つの桎梏の災難を被っている。これらの二つの難関を打ち破ぶってこそ，青年中国，新生中国は，もしかすると天と地との間に再びあらわれるかもしれない。その時，中国はまさに5000年来有してきた栄光の文化を再び抱き，世界のなかで活動を続ける」と語った。

浅野先生の序文からいますでに56年が経った。わたしたちの中国は共産党の指導のもとで，

蒋介石を倒し，日本帝国主義に勝利を収め，欧米の帝国主義を追い払い，「青年中国，新生中国」を案に違わず「天地に再現させた」。浅野先生の科学的な予言が実現し，浅野先生のわが国の人民に対する期待を裏切るようなことはなかった。

（三）

1927 年，潘大道先生が暗殺された。上海法科大学は上海法学院に改組された。院長は楮輔成先生で，教務長は瀋鈞儒先生[16]であった。わたしは上海法学院で社会学，労働法などの科目の担当を続け，また同時に復旦大学，呉淞中国公学大学部，国立労働大学，上海法政学院で社会学，社会学史，労働問題などの科目を担当した。しかし，わたしが講じた社会学は基本的にブルジョア社会学であった。たとえば，わたしが労働問題と労働法を講義した時，労働者に対して満腔の同情を抱き，また『労工法論』のなかで，「自分の良心に背いて他人に迎合したくないということばも，自信のなさのあらわれだ」と書いたが，やはり労資協調の社会改良主義から抜けだしていなかった。

1931 年の 9・18 事件[17]は，わたしの思想に強烈な影響を及ぼした。わたしが学んできた社会学のなかからは，この問題を解決する正解をみつけることができなかったし，そのうえこの問題を解決する方法もなかった。そこで，わたしは社会学の教育で，李達の『現代社会学』と李聖悦（すなわち李平心）の『社会学概論』[18]（ママ）を教材として採用した。同時に自らもマルクス＝レーニン主義の立場，方法，観点の使用を試みて，『社会学概論』を書きあげて，上海世界書局から出版しようと原稿を手渡したが，世界書局はこの本は「赤化」を宣伝するものと考え，わたしに原稿代を全部支払ってくれたけれども，その後とうとう出版しなかった。

わたしは劉道衡同志の援助によって『流火月刊』を創刊し，ソ連と連合し，日本の侵略に対して抵抗することを断固主張し，『流火月刊』を 9 号出版したが，経費の出所の目処がたたず，自ずと停刊になった。

1932 年，わたしは中共の直接の指導のもとにあった「社聯」（すなわち社会科学者聯盟）に加入し，まもなく「社聯」の機関誌『現象月刊』の編集長になった。

同年の 12・8 事件[19]後，呉淞中国公学が日本帝国主義の砲火によって焼き尽くされ，そこで旧フランス租界の一つの家屋を借りて，別に新たな中国公学を創設し，わたしは社会学部の主任に任ぜられた。当時，わたしは教授名簿を提出したが，そのなかに一人の教授何思敬があり，当時の教務長樊仲雲は何思敬を共産党だと批判した（樊仲雲は後に漢奸の教育部長になった）。樊仲雲は何思敬の名前を一見して，わたしの同意も求めず，すぐにぷりぷり怒って何思敬の名前を削除した。その場でわたしは樊仲雲と正面衝突を引き起こした。この学校はまた抗日派と非抗日派の闘争によって，争議が次々起こり，学校理事の楊杏佛[20]先生が自ら調停役をかってでたけれども，なんの役にもたたなかった。

うえに述べたように，わたしは『現象月刊』を中心となって編集したために，1933 年 12 月に国民党反動派によって逮捕され，龍華警備指令部の留置場に監禁された[21]。当時の偽軍事法廷が『現象月刊』にくだした罪状は「ソ連を宣伝し，階級闘争を扇動し，政府を攻撃し，国民党を中傷した」ということであった。

わたしが逮捕されたということは，同時にわたしの社会学の教育の生涯の終りでもあった。

（四）

わたしは上海で孫本文教授の紹介で東南社会学会[22]の学術活動に参加した。社会学会をとおして，わたしは呉景超，呉沢霖，言心哲，応成一，範定九，潘光旦，潘菽，柯象峰，楊開道，黄凌霜，陳達，呉文藻，許仕廉，銭振亜，毛啓俊と知り合ったが，当時かれらの絶大多数はアメリカ留学をしており，わたしだけが日本留学生であった[23]。費孝通，雷潔瓊，李景漢などの教授については「文革」後，北京に行ってからようやく顔見知りになった。

東南社会学会は『社会学刊』（写真挿入：訳者）という機関誌を発行しており，呉景超教授が編集の責任を負っていた。わたしは呉に促されて，文章を書いた[24]。

東南社会学会大会で，もっとも印象深かったことは次の二つである。（1）一つは上海の鄧脱摩飯店での大会で，蔡元培先生がこられて報告をしたこと，偽上海社会局局長潘公展も講話をしたことである。潘は陳立夫の配下の反共の老練なやり手である。潘が当時偽善的に次のようにいったことを覚えている。「われわれの政府は人民の公僕であり，われわれの希望は人民のために草刈りをすることである」。わたしはそれを聞いて，なんどもかれに反駁したくて，本当に人民のために草刈りをして欲しい，人民をちりあくたとしてあつかってはいけないといいたかった（なぜならば，当時学校の進歩的な学生がかれらによって捕らえられ，投獄されたものが多数いたからである），しかしわたしは極力自分を抑制して，ついにこの「潜台詞」（はっきりと話さない暗示的なことば）を飲み込んだ。（2）一つは南京での年次大会で，当時の著名な優生学者潘光旦先生[25]が多くの家系図をもってきたことである。そのなかには呂氏の家系図があり，たとえば宋朝期の呂端，呂蒙正，呂夷簡，呂公著，呂好問，呂祖謙（『東莱先生

『社会学刊』（創刊号，1929 年 7 月）表紙

博議』という著書をもつ，呂本中もまた東萊先生と号す）などすべては高官や学者である。潘は，これはすべて遺伝の影響であると考えたが，しかしわたしはもっぱら反対の意見をもっていた。わたしは，これは生理的な遺伝ではなく，社会的な封建関係の必然であると考えた。しかし，当時顔を真っ赤にして争うことはしなかった，学問の民主的な雰囲気はやはりよかった。

潘光旦先生のことに触れたが，過去わたしは復旦大学で授業をしたが，いつも先生といっしょにぼろぼろな白タクに乗っていた。その後，1944 年ぐらいに，わたしは重慶の偽教育部の専門家会議で潘光旦先生に出合ったが，先生はその時，西南聯合大学の教授であり，専門家の資格で会議に参加していた。会議では，わたしは先生と並んですわった。先生はその時，会議の席上で一首の詩を書いて，わたしにみせたことがあった。おぼえているのは，「而今時勢不須論，温飽可期即国恩。水月鏡花吾亦愛，須知別是一乾坤」（いまの社会情勢は論ずる必要はない。衣食さえあれば，国家の御恩である。鏡花水月はわたしも好きだが，別の世界にあるかも知れない）。この詩でかれがいいたいことは，国民党はきれいごとばかりいってもだめだ。人民に十分な衣食さえ満足させれば，国家の大きな恩と徳である。ここに潘先生の思想の変化をみいだすことができる。「文革」後，わたしが北京に行った，潘先生はすでに亡くなったと聞いたが，これはほんとうに学術界が埋め合わせるべきものがない損失である。

（五）

1934 年，わたしは共産党の命令を受けて，国民党機関の活動に行き，南京憲兵学校で犯罪学の講義をした。わたしが講義をしたのは「犯罪社会学」（後に，上海会文堂書局から出版された）である。たとえば，「気候と犯罪」のなかで，「・・・しかし，気候は犯罪に決定的な影響を与えない。仮に人びとの民生問題（当時はこれが合法的な名詞であった）がすべて適切な解決を得られるとすれば，わたしは同じ夏でも性犯罪が起こることなく，同じ冬でも財産にかかわる犯罪が起こらないと思った。たとえば，灼熱の地ダカールでは，人民は政治に無関心であり，革命はない。しかし，インドは灼熱国ではないか。インドはイギリス帝国主義の政治経済的な圧迫を受けたが，かつて 1919 年から 1921 年の間に，大規模な民族革命運動が起こったではないか。したがって，犯罪は社会のなかから生じるものであり，社会的原因を無視し，しかも気候に求めたり，天に求めたりすることはいっそう社会的原因をあいまいにしてしまうのである」と説明した（『犯罪社会学』，p.10）。

また，「遺伝と犯罪」のなかも「事実は，犯罪そのものが決して遺伝的なものではなくて，社会環境ものであることを証明している。すなわち，このましくない家族が篤実なこどもをつくることは簡単なことではない。ところが，反対に篤実なこどもはよい家族から多くつくられる。したがって，ひとの善悪は後天的なものであり，先天的なものではないのである。

いいかえれば，遺伝ではないのである」，「したがって，遺伝を犯罪の直接原因とみなすことは自ら自己を慰める妄想にすぎない。社会のなかから犯罪を認識し，そのうえで犯罪を理解することができる・・・」と説明した（同上，pp.143 ~ 144）。

国民党反動派の官吏の大多数はいささかばかである。たとえば，わたしは『犯罪社会学』の「貧困と犯罪」なかで，公然とエンゲルスの高名を引例することができた。わたしは，エンゲルスは犯罪の増加はプロレタリアの増加と正比例していると考えていると次のようにいった。「・・・赤貧は労働者を次第に餓死させるか，あるいは労働者をためらうことなく自殺させるか，それとも労働者に自分の必要な分を取らせるか――すなわち，ドイツ語でいうところの強奪か。必ずこの三つから一つが選択される。・・・」と（同上，p.45）。

また，「迷信と犯罪」のなかで，あるひとは『宗教は衆生を悩ませるうめきであり，人民のアヘンである』という，もしこの話が正しければ，それでは迷信は人民の毒薬であると説明した。ここでいう「あるひと」は明らかにマルクスを指しているが，わたしはなぜかマルクスの名前をだすことを故意に避けた。（同上，p.87）

わたしがなぜ相当長い期間，国民党の憲兵学校で「犯罪社会学」を講義することができたのか。その理由は主にわたしの講義原稿のなかで，基本的に国民党総理孫中山先生の遺した学説や著作を論拠としたからである。これはひょっとすると，いわゆる「合法闘争」かも知れない。

（六）

解放後，学院学部が調整され，社会学部が廃止され，社会学の課程も廃止された。社会学は社会科学の一つの部門であり，なぜ社会学の課程だけを廃止しなければならなかったのか。これは康生が 1957 年 8 月 20 日，地方の政治課程教師を対象に北京で実施された政治課程教師座談会から答えをだすことができる。煩わしさを厭わずかれの話を引用したい。

康生は次のようにいった。「ブルジョア社会学とはなんなのか。最初に，中国で社会学部を設置したのはセントジョーンズ大学であり，当然文化侵略の機関である。その後，他の学校も社会学部を設置した。ブルジョア社会学の役割は改良主義をまき散らし，階級闘争を緩和させ，帝国主義のための走狗を養成することである」，「社会学は二大流派がある。一つは理論派で，たとえばロシアのクロポトキンである。他の一つは実用派であり，イギリスからアメリカへ伝わった，いわゆる各種の調査である。牧師たちはすべてこれらを行なうことできる。調査は外国の経済，軍事，文化の侵略のためである。清華大学が行なった社会学はイギリスから仕入れて売ったものであり，いっそう際立っている。中国で社会学研究に携わるひとは，おおよそ二つの役割をもっている。すなわち，国内では，かれらは農村調査をとおして共産党の農村での活動を知って，農民運動を防止あるいは阻止して，地主階級を保護すること，

また，工場調査をとおして共産党の都市での活動を知って，プロレタリアが団結しないようにたきつけて，労働者運動を破壊し，ブルジョア階級を保護すること，また，少数民族調査をとおして，国民党の大漢族主義を宣伝し，少数民族の分裂を双方にそそのかして，いっそう統治階級によるかれらの抑圧を容易にすることである。中国の多くの社会学者は，いずれも国民党の社会部と関係があったし，たとえば，陳達のように社会部で仕事さえしていた。みんなが知っているように，国民党の社会部のボスは谷正綱であり，実際には一つの情報機関であり，とくに革命を壊しただけである。したがって，中国の社会学者たちのなかには改良主義はそれほど多くない，社会学者は共産党や革命運動を消滅させ，抑圧しようとした」，「国外で，中国の社会学教授たちは帝国主義と複雑で入りくんだ関係をもっており，帝国主義の『第五縦隊』である。とくに，清華大学の社会学者はこの仲間である，かれらはイギリスやアメリカに留学し，帰国後，社会調査を行ない，帝国主義のために奉仕したのである」。費孝通がきわだった例である。最近，かれが書いた『重返江村』（再び江村を訪ねる）はやはり帝国主義のために奉仕したものである。かれらは自分たちの調査の質問にはいい方法と技術があるというが，実際には反動的なものである。陳達の人口調査は国民党政府の県長と公安局長に頼んだものであり，それ以外は一連の探偵技術であり，どれもわれわれの用いることができないものである」。（ここから以下の囲い線内は『社会学通訊』には掲載がなく，『李剣華先生記念集』に掲載されている文章である：訳者）

「解放後，反動派の社会学を取り消したことは完全に正しいことである。これは非常に大きな成果だが，かれらは気に入らなかった，・・・当然，以前に携わった社会学から仕事を替えなければならなかったので，非常に不満であった。百花斉放・百家争鳴期に，労働幹部学校の陳達は人民大学の呉景超，李景漢らと共同して，高等教育部に抗議を申し入れた・・・」，「多分 1 月 16 日，陳達は北京政治協商会議に出席して，社会学を回復させる提案を行なった。その後，陳はまた全国政治協商会議に提案を行なった。人民大学は李景漢，呉景超が中心となり，労働幹部学校は陳達が中心となり，政治学院は雷潔瓊が中心となり，社会学を回復させる一連の活動がはじまった。各学校間の連絡と指導をしたのは費孝通であり，かれは先頭に立って采配を振るった。費孝通は 2 月 20 日付けの文滙報に，『社会学について語る』を発表し，右派分子が社会学を回復させる企てのために，全面的な総則　綱領を提出した」，「費孝通は自分と自分たちの仲間は，過去社会学をやったといった。実際には，この学問の名にかこつけて邪悪な考えを押し付けたものである。いったいどういう学問と呼ぶべきなのか。かれらもはっきりといえない。わたしはそれらを「帝国主義の情報学」と呼ぶ」。

「費孝通は，自分たちがやったのは，実際には人口調査，農村調査，工場調査，民族調査などであり，おおかた人類学に帰することができるといった。・・・かれの話によれば，社会学を行なうことは中国社会に必要なことだ，・・・かれはまずはじめに党と大衆の関係，人民代表大会制度，人民民主主義独裁を調査しなければならないという。要するに，かれは共産党

と人民民主主義独裁に問題があると思っている。次に人事制度に多くの問題があると考えている，・・・第三にかれは知識分子の問題を調査したいという，第四に男女の問題を研究したいという，第五に人口問題を研究したいという。要するに，かれは各方面の矛盾を集中的に研究しなければならないといっている。実際にかれは矛盾を研究し，矛盾を暴露し，矛盾をあおり，人民内部の矛盾を，外部の矛盾に変えるつもりである。そこで，費孝通は再び江村を訪ね，李景漢は再び北京郊外を訪ねた。かれらは，矛盾はとても多いという。また，李景漢は，昔は農民を牛馬として使っていたが，いまはトラクターとして使っているという」。

「3 月 30 日，費孝通は宣伝活動会議で，社会学を回復させる 7 項目の綱領を提起した。費孝通は毛沢東の発言を聞いて，社会科学はわずかに前途があると思った。わたしたちはその時，その話がわからなかったが，後に宣伝活動小グループ会議で雷潔瓊の談話を聞いて，わたしはやっとわかった。もともとかれらがいう社会科学は，ブルジョアの社会学なのである。かれらは中国の社会科学は遅れているというが，いっているのはブルジョアの社会学のことである。費孝通は，また陳達の自宅で会議をもち，社会学を回復させることについて，さらに具体化した。かれらの任務は調査であり，機構を設立しなければならないと説明した」(26)，以上が康生の談話の内容である。

社会学の回復について，また一つのエピソードがある，1957 年のことである。ある日，わたしは思いがけなく，一通の通知を受け取った，ある場所で，食事をしながら社会学の回復の問題を話したいというものであったが，その時，通知を受け取った時は，すでに日時が過ぎていたので，参加することができなかった。ほどなく，言心哲教授が，重点批判の対象となったが，わたしは表彰された。わたし一人だけが行かなかったということである。まるでわたしが社会学の回復に不賛成であるかのようであり，ほんとうに口がきけないひとが苦い黄連を飲んだようであり，苦しみがあっても口にはだせなかった。

当時，言心哲教授が主張した社会学の回復は費孝通や呉景超らの教授と事前に打ち合わせがあったのか，あるいは暗黙の了解があったのか，それとも偶然の一致であったのかはわからない。要するに，言心哲は社会学の回復を主張したためにバケツの水をひっくり返したような批判を受けた。

（七）

うえに引用した偽マルクス主義者康生の長い談話が，解放後，社会学課程と社会学部を取り消したのであり，完全に康生のよくない考えである。

レーニンはいう「階級闘争のうえにきずかれている社会に『公平無私の』社会科学はありえないので，……賃金奴隷制のなかで公平無私の科学を期待することは，ばかげた，おめでたいことである（『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』）。したがって，階級社会の

なかに，ブルジョア階級がある以上必然的にブルジョア社会科学がある。たとえば，ケインズ学派の経済学はブルジョア経済学である，だとすれば経済学を取り消すことができるとでもいうのか。ブルジョアの文，史，哲，法などの社会科学であれば，文，史，哲，法などの社会科学を取り消すことができるとでもいうのか。

たとえば，マルクス以前の古典政治経済学は資本主義がもっとも発展したイギリスで形成されたものである。まさに A. スミス，D. リカードは経済制度を考察した時に，労働価値論の基礎を打ち固めた。マルクスはかれら二人の仕事を継続した。マルクスはこの理論を厳正に論証し，かつ一貫して発展させた」と。

レーニンはまた次のようにいう「プロレタリア文化は，どこからとも知れず飛びだしてきたものではなく，プロレタリア文化の専門家と自称する人びとが頭で考えだしたものでもない。そういうことは，みな徹頭徹尾たわごとである。プロレタリア文化は，人類が，資本主義社会，地主社会，官僚社会の圧制のもとで，つくりあげた知識のたくわえを合法則的に発展させたものでなければならない」（『青年同盟の任務』）。

マルクスは資本論のなかで，ブルジョアの学者の学説の資料を大量に引用したのみならず，またブルジョアの「工場監督官の報告」，「児童労働調査委員会の報告」，「公共衛生に関する報告」，「勅命鉄道委員会の記録」などの資料も大量に引用した。

康生はブルジョア社会科学に対して，棒で殴り殺すような態度をとった。ブルジョア社会学をわからなくても，それでもわれわれはマルクス主義に基づいた立場，観点でブルジョア社会学をプロレタリア社会学に改造することができる。われわれは半植民地であった旧中国は反動の一面があったことは否定しない。しかし，康生は中国の社会学の教授たちを「帝国主義の第五縦隊」といい，ブルジョア社会学は「帝国主義の情報学」とさえいったが，これは非常に独断的あり，きわめて荒唐無稽である。

康生はブルジョア社会学の特徴は，「調査」であると考えたが，この調査という方法はやはりブルジョア社会学の長所だとは知らなかった。われわれはこの長所をまさに学習しなければならない。問題となるのは，第一にこの調査は一体全体だれのために調査なのか。第二に調査の真実性と信頼性の程度である。

毛沢東同志は次のようにいう「情況を理解するための唯一の方法は社会を調査することである」。「調査なくして，発言権なし」。「すべての実際活動家は，目を下に向けて調査を行なうべきである。理論だけで，実際情況がわかっていない者にとっては，この調査活動がとくに必要である。そうでなければ，かれらは理論と実際を結びつけることはできない（『農村調査の序言と後記』）。調査研究は分けることができないし，調査のあとには必ず研究しなければならない。研究は上下，左右，前後の相互関係を研究しなければならない。「実事求是」（事実に基づいて真理を検証すること），「すべては事実に基づいて考えること」はわが党の一貫して優秀な態度である。指導活動を行なう時，もし本当の情況を知らないならば，そこで命

令をくだすことは，「目を閉じて雀を捕ること」と同じである。しかし，雀が飛び去っても，問題が大きくないけれども，指導活動を行なうひと，とくに大国の指導を行なうひとでは必ずや災難に変わるであろう。康生は調査研究を「反動のもの」といいなしたが，これは故意的な歪曲である。

「四人組」の粉砕によって，党中央の胡喬木，鄧力群，于光遠などの同志の支持，そして費孝通，呉沢霖，雷潔瓊，呉文藻，言心哲らの同志の努力によって，中国大陸で 30 年近く中断していた社会学がまた復興しはじめた。

現在，北京の中国社会科学院はすでに社会学研究所を設立したし，北京市にも社会学研究所がある。上海社会科学院もすでに社会学研究所を設立したし，その他の各省の社会科学院もすでに社会学研究所を設立したし，あるいはこれから設立しようとしている。各大学や単科大学，たとえば復旦大学分校はすでに社会学部を設置したし，北京大学，華東師範大学なども社会学課程をすでに設けたし，あるいはまもなく設けようとしている。北京や上海以外も，各地でいずれもまもなく設置を準備している。

社会学が長い間断絶していたために，解放前に社会学部を卒業した同窓は現在すでに中年以上のひとになっている。しかも社会学の教授は少なくともすでに古希の齢を超えている。社会学の専門家を養成するために，北京の中国社会科学院社会学研究所はすでに 2 回の社会学講習班を開設したし，華中工学院もまもなく社会学講習班を開設しようとしている。

当然，われわれが目下，関係をもっているのは主に，やはり欧米や日本といった資本主義国家の社会学である。しかし，われわれは社会主義制度の国家である，わたしたちは必ず四つの基本原則を堅持し，資本主義国家の社会学のなかから批判的に栄養を吸収し，資本主義や修正主義の観点に反対することができるとわたしは信じている。まさしく，当面のわが国のもっとも顕著な問題である人口問題，住宅問題，労働問題，女性と児童問題，家族と婚姻の問題，高齢者と中年の問題，民族問題，青少年違法犯罪問題，農村問題を，国家の機密保持の法律に違反しないで，国家の重要機密の漏洩に違反しないという条件のもとで，力の及ぶ限り，実際にそくした調査研究に従事し，適切で実行に移しうる建議を提起し，党と政府に役立つ助手となり，四つの現代化に対して有益な貢献をなすと信じている。

1982 年 4 月 1 日　上海にて

〔訳者注〕

(1) 『社会学通訊』は 1981 年創刊で，1984 年の第 6 号まで全部で 18 号刊行された（1981 ～ 1982 年は隔月刊，1983 年は季刊，1984 年は隔月刊）。1981 年から 1982 年の第 3 号までは中国社会学研究会編で，1982 年第 4・5 号合併号からは中国社会学会編になった（中国社会学研究会から中国社会学会へ改称されたことによる）。1985 年からは，『社会調査与研究』（第 1 号から第 6 号まで刊行された）に刊名が変わり，さらに 1986 年に現在の『社会学研究』（隔月刊）に刊名が変わるとともに，公開出版となった。それまでは外部に公開しない内部刊行物で，表紙には「内部刊物　注意

保存」の文字があったが，訳者は 2016 年 12 月 26 日に上海図書館で 1982~1984 年分まで閲覧およびコピーすることができたし，また 1981 年分は中国の古書店で購入することができたうえの三つの雑誌はすべて中国社会科学院社会学研究所による編集である。

⑵ 康生（1898 ~ 1975）は「党副主席，中央文化革命小組顧問。1937 年ソ連から帰国。延安で党中央社会部長，情報部長を務め，特務工作の責任者として党内のスパイ摘発工作に力を発揮。42 ~ 43 年延安の整風運動を指導し，多くの幹部の粛清に関与した。45 年党中央政治局委員。建国後，病気療養後，56 年党中央政治局候補委員。反右派闘争で『右派』の摘発を行なう。62 年党中央書記処書記。66 年中央文革小組顧問となり，党内の実権派摘発をはじめ，数々の冤罪事件を起こして幹部と大衆を迫害し，党内に隠然たる勢力をもった」（望月暢子，1999，「康生」，天児慧ほか編『岩波現代中国辞典』，岩波書店，pp.296~297 から一部抜粋）。また，この講話の前後，1956 年 9 月には中国共産党第 8 期 1 回中央委員会全体会議で，中央政治局候補委員に当選し，1958 年には中央文教小組副組長に任じられて，『毛沢東選集』（第 4 巻）の編集責任者となり，またいくつかの文化教育方面の仕事を行なった。そして，62 年 9 月には，共産党第 8 期 10 回全会で，中央書記処書記に定員数を増やして選出された。66 年文革開始後，中央文革小組顧問および中共中央政治局委員，常務委員，中共中央副主席などに任命されて，多くの罪名をねつ造し，多くの党，政府，軍の幹部を攻撃し，罪がないのに故意に陥れ，迫害した。69 年，中共 9 期中央委員，中央政治局委員および中央政治局常務委員に選ばれる。70 年中共中央組織宣伝組組長に任じられる。73 年 8 月中共 10 期中央委員，中央政治局常務委員，中共中央副主席に選ばれる。75 年 12 月 16 日北京で死去，中共中央は当時，訃報でかれを「中国共産党優秀党員，中国人民の偉大な革命戦士およびマルクス主義理論家，党と国家の卓越した指導者の一人，中国人民の偉大なプロレタリア革命家，反修正主義の光栄ある戦士」と称えた。80 年 10 月 16 日中共中央は，中央紀律検査委員会の『中共中央が中央紀律検査委員会指示した康生，謝富治問題の二つの審査報告のコメント』に基づいて，康生の党籍を剥奪し，弔辞を取り消した。その後，中央組織部は遺骨を八宝革命共同墓地から移動させて，林彪，江青の反革命集団の主要メンバーの一人とされた（百科，http://baike.baidu.com から抜粋）。

⑶ 上海社会科学院社会学研究所編（責任編集呉書松），1995，「李剣華年譜（1900 － 1993）」『李剣華先生紀念集』所収，上海社会科学院社会学研究所，pp.94~96。

⑷ 李剣華のより詳細な経歴については，本訳稿の末尾の「資料 1　李剣華年譜（1900 － 1993）」を参照されたし。李剣華の妻胡綉楓は，関露（1907 ~ 1982，本名胡寿楣）の実妹である。関露について訳者注 21 を参照されたし。

⑸ 訳者は，今年 2017 年 1 月になって，呉書松先生（1940 年生まれ）が李剣華先生の晩年の助手であったことを文献からはじめて知った（葉雪楓，2016，「李剣華：一個社会学家在上海灘的紅色伝奇」（李剣華：一社会学者の上海での革命的伝奇）『新民周刊』，25 期，上海新民周刊社，p.53）。幸いなことに，2017 年 2 月 24 日，上海社会科学院で呉書松先生にも，葉雪楓さんにも長時間にわたって，李剣華先生に関するお話を伺うことができた。呉書松先生とは 25 年振りの再会であったが，1991 年の私たち家族の上海生活を覚えていてくださった。

⑹ 陳樹徳，1989，「中国社会学的歴史反思」『社会学研究』，第 4 期，中国社会科学院社会学研究所，pp.10-11。

⑺ 「三反・五反運動」といわれ，1951 年 11 月から 52 年 8 月にかけて展開された，官僚の汚職腐敗と資本家の不法行為とを批判・摘発する政治運動といい，三反とは 51 年 11 月にはじまった党員幹部の汚職，浪費，官僚主義に反対する中共中央の指示による大衆運動であり，五反とは 52 年 1 月にはじまったブルジョワ階級に賄賂，脱税，国家資材の横領，手抜き仕事と材料のごまかし，国家経済情報の窃盗に反対する運動をいう（三好章，1999，「三反・五反運動」，天児慧ほか編，前掲書，pp.421~422 から一部抜粋）。

⑻ 李剣華が日本に留学した背景はなにか。葉雪楓は「1921 年はまた中国共産党が誕生した年でもある。李剣華は高校卒業後，上海を経て日本へ留学した。当時，中国の社会主義思想と共産主義思想に影響を与えたのは主として二つのルートがあった。一つは李大釗をリーダーとするソ連から学んだ北京の共産主義グループと（ソ連で学んだという意味でなく，実際李大釗は早稲田大学に学んでいるが，ロシア革命に寄せ『新青年』に「ボルシェビズムの勝利」,「庶民の勝利」などを発表したこと，コミンテルン派遣の使節と共産党創立を協議したことがある：星挿入），もう一つは陳独秀をリーダーとする日本から学んだ上海の共産主義グループである。上海の共産主義グループは，すでに志を抱く青年をマルクス主義と関係をもたせるために経済的な援助をはじめていた。たとえば，李剣華は東京の日本大学社会科に入学し，社会学を専攻し，多くのマルクス主義の著作を読む機会があったし，日本共産党員や東京にあった中国共産党の日本支部と直接接触した」（葉雪楓，2016，前掲，p.52）と記述している。これからみれば，李剣華は共産党の経済的援助によって日本に留学したと読みとることができるが，しかし，訳者はそれと異なる理解をしている。とういうのも，李剣華は故郷四川省の大地主のこどもでありお金に困らなかったこと，社会学は当時流行していたとかれ自身が思ったから専攻したこと，日本で同じ中国からの留学生に自分は国民党員でも共産党員でもないと語ったこと，1931 年 9 月の関東軍が起こした柳条湖事件の時までは大学などでブルジョア社会学および労資協調の社会改良主義を講じていたこと，入党は 1934 年 3 月であったこと，すなわち，もし共産党からの経済的援助によって日本へ留学したならば，入党は留学時の 1921 年，帰国時の 1925 年か，そのころと考えることが妥当であることなどという事実や理由があるからである。しかし，「李剣華は思想上の入党が先にあり，組織上の入党はあとである」（王堯山･趙先，1995，「精神財富永留人間―懐念李剣華同志」『李剣華先生紀念集』，p.24）といわれるように，李が日本留学時から徐々に共産主義思想に目覚めていったことが本訳稿のなかのかれ自身の記述からも明確にわかる。

⑼ 日本大学のホームページの社会学科の沿革には「日本大学文理学部社会学科は，わが国の私立大学における最初の社会学科として，1920（大正 9）年に創設されました」とある（http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/html1/gakka.html）。

⑽ 李剣華がこの本を読んだ時期，およびかれがパンフレット（小冊子）と記しているところから判断すれば恐らく堺利彦の『社会主義学説の大要』（シリーズ名：建設者パンフレット，出版社：建設者同盟出版部，出版年：1922 年，大きさ，容量等：87p ; 19cm）であろう。

⑾ 李剣華は日本留学時に，「多くのマルクス主義の著作を読む機会があったし，日本共産党員や東京にあった中国共産党の日本支部と直接接触した」という（葉雪楓，2016，前掲，p.53）。

⑿ 李剣華の故郷の四川省大邑県には，当時大地主の劉文彩（1887 ～ 1949），その弟で軍閥の劉文輝（1985 ～ 1976）がいたので，仕事を求めることはなんらの困難もなかった（呉書松先生談，2017 年 2 月 24 日）。劉文彩の邸宅は,「大邑劉氏荘園」として国家が指定した全国重点文物保護単位となっているほどである（中華人民共和国国務院，1996 年 11 月 20 日公布）。

⒀ 易家鉞, 1921,『社会学史要』, 商務印書館と思われる（国家図書館および上海図書館蔵書検索から）。

⒁ 1924 年の中国国民党と共産党の合作から 1927 年 7 月の国共分裂までを，中国では大革命期，第 1 次国内革命戦争期などと呼ぶ（土田哲史, 1999,「国民革命」『岩波現代中国事典』, 岩波書店, p.339）。

⒂ 浅野研真（1898~1939）は真宗大谷派の寺院に生まれ，大徳寺の修行僧となり，のちに函館刑務所教誨史師となるが，退職して日本大学に進む。卒業後は，同大学社会学研究室助手のかたわら，1925（大正 14）年東京労働学校を開設し，教頭になる。1928（昭和 3）年，文部省留学生として渡仏。1930 年新興教育研究所の創立に参加，プロレタリア教育運動を推進した。1932 年，友松円諦らと仏教法政経済研究所を設立，仏教の社会史的研究に専念した。全日本仏教青年同盟主事，日華仏教協会理事を歴任。著書に『レニンの社会学説』（1923，レニン著 , 浅野研真訳），『労働学校

研究』（1925），『インタナショナル発達史』（1925），『実証派犯罪学』（1926，エンリコ・フエリー著，浅野研真訳），『社会現象としての宗教』（1928），『プロレタリア教育の諸問題』（1931），『社会学概論』（1931，マルセル・デア著，浅野研真訳），『新興教育学』（1931），『社会宗教としての仏教』（1934），『日本仏教社会事業史』（1934），『仏教社会学研究』（1935）などがある（デジタル版日本人名大辞典，国立国会図書館サーチから引用）。因みに，うえの『社会現象としての宗教』は，李剣華による書評がある（李剣華，1930，「（書評）浅野研真著　社会現象的宗教」，『社会学刊』，中国社会学社，第 2 巻第 3 期）。

⑯ 瀋鈞儒（1875~1963 ）は浙江省出身で，清末期に進士に合格しており，1905 年に清政府の派遣で，日本の法政大学に留学した（1905 年から 1908 年）。帰国後は辛亥革命に参加し，中国同盟会に加入し，五四運動の期間中は新道徳，新文化を提唱する文章を書いた。民国期は国会議員，広東軍政府総検察庁検察長，上海法科大学教務長などを歴任し，解放後は最高人民法院院長，全国政協副主席，全国人大常会副委員長及び民盟中央主席などに就いた。

⑰ 昭和 6 年（1931）9 月 18 日夜，奉天（瀋陽）北部の柳条湖で関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件で，関東軍はこれを中国軍の行為として出兵し，満洲事変の口火を切った。この柳条湖が，「わたしの思想に強烈な影響を及ぼした」と李剣華自ら述べているように，李を共産主義思想にさらに強く固定させ，転換させたエポックであったとみなすことができよう。

⑱ 恐らく，李聖悦の『現代社会学理論大綱－唯物史観的社会学的基礎理論』（1930，上海光華書局）を指すと思われる。

⑲ 1932 年 12 月 18 日，租界警備の日本海軍陸戦隊と中国十九路軍との間に勃発した戦闘を指す。

⑳ 楊杏佛（1893—1933）は，経済管理学者，辛亥革命社会活動家，中国人権運動の先駆者，中国管理科学の先駆者である。中華民国の孫中山大総統の南京政府の公文書受納発送担当室室長を経て，アメリカのコーネル大学で機械科を卒業後，ハーバード大学大学院で経済管理学の修士号を取得。1918 年帰国後，国立東南大学教授に就き，常に共産党員の惲代英と接触，また勤務のない時間を利用して中国共産党画が創立した上海大学で定期的にテーマ講座や講演を行なった。楊杏佛のテーマは「労働問題－社会的側面から中国政治の前途をみる」である（曹晨輝，1984，「中国共産党領導下的上海大学社会学系－ 1923~1927 －」，『社会学通訊』，第 5 期，中国社会学会，p.76 および星明，1995，「上海大学社会学部の設置－中国共産党による大学の経営－」，『中国と台湾の社会学史』所収，行路社，pp.47~52 を参照されたし）。楊杏佛は 1933 年 6 月 18 日，国民党の 4 人のスパイによって銃で暗殺された（楊杏佛の生涯については，百度百科 http://www.baidu.com の楊杏佛から引用）。

㉑「1933 年 12 月，左翼教授李剣華は「社聯」の機関誌『現象月刊』の編集長になったために，国民党政府に逮捕された。1934 年 3 月，方法を講じて救済されて，出獄後に中国共産党に加入した。ただちに，国民党の多くの要職を担当し，かつまた共産党の地下活動を積極的に行ない，かつて周恩来，李克農らから直接指導を受けたことがある」（葉雪楓，2016，前掲，p.52）。

この逮捕時の具体的な情況については，『魂帰京都－関露伝：中共隠蔽战线的女特工』（魂，みやこに帰る－関露伝：中共秘密戦線の女スパイ）（柯興著，2010 年，金城出版社）の第 8 章「李剣華被捕」に詳しい（関露 1907 ~ 1982 の本名は胡寿楣で，李剣華の妻胡綉楓の実姉である。関露は解放前に中国共産党の命を受けて，日本の情報機関に潜入した。解放後は潘漢年に連座したかどで 1955 年 6 月 14 日に逮捕され獄中 2 年（1957 年 3 月出獄），また文革 2 年目の 1967 年 7 月 1 日にも逮捕され，8 年間獄中にあった（1975 年 5 月 20 日出獄）。合わせて 10 年間も獄中にあった。1982 年 12 月 5 日の死去の 8 か月前の 1982 年 3 月 23 日に名誉回復したが，実に，1955 年から 28 年間も無実の罪を着せられていたのである。ここでの，事実関係はうえの『魂帰京都－関露伝：中共秘密戦線の女スパイ』から引用した。関露について，日本のものでは山本秀也，2015，「関露伝」

（上）・（下），『世界』，2015 年 3 月号（pp.280~289），4 月号（pp.254~263），岩波書店。遠藤誉，2015，『毛沢東－日本軍と共謀した男－』，新潮書店，p.179 などがある。

(22) 東南社会学会は 1928 年 10 月 29 日に，主に上海および南京の大学の社会学教授たちによって正式に創立された（1929，「東南社会学会紀事　組織経過」『社会学刊』，第 1 巻第 1 期，東南社会学会，p.1）。その後，1930 年 2 月 8 日に全国規模の学会に改組され，団体名も中国社会学社に改名した（1930，「中国社会学社成立会記」『社会学刊』，第 1 巻第 4 期，東南社会学会，p.1）。

(23) 孫本文の 1947 年の調査によれば，中国の各大学の社会学教授 145 名の留学先の内訳はアメリカ 74 名，フランス 11 名，日本 10 名，イギリス 9 名，ドイツ 4 名，ベルギー 1 名，アメリカ人教授 8 名，無留学 28 名である（孫本文，1948，「中国各大学社会学教授姓氏録」『当代中国社会学』所収，勝利出版公司，pp.319~327）。

(24) 『社会学刊』（1929 年 7 月発行の第 1 巻第 1 期から 1930 年 9 月発行の 4 期までは東南社会学会から，以後 1930 年 10 月発行の第 2 巻第 1 期からは 1948 年 4 月発行の第 6 巻合刊までは中国社会学社から刊行）は 1929 年の創刊から 1948 年の停刊まで発行された（但し，1937 年 4 月 22 日の第 5 巻第 3 期の発行以後，1948 年 4 月の第 6 巻合刊の復刊まで 11 年間休刊。そして，この第 6 巻合刊を最後に廃刊となった）。李剣華は次のような論考を寄稿している。「社会学在科学上的地位」（1929 年，第 1 巻第 1 期），「（書評）孫本文　社会学 ABC」（1929 年，第 1 巻第 1 期），「社会学体系論」（1929 年，第 1 巻第 2 期），「孔徳（コント）的生平及其学説」（1930 年，第 1 巻第 3 期），「（書評）許徳珩的社会学方法論」（1930 年，第 1 巻第 4 期），「（書評）崔載陽的近世六大家社会学」（1930，第 2 巻第 1 期），「（翻訳）霍布浩斯（Leonard Hobhouse）的社会学説」（1930，第 2 巻第 1 期。これは松本潤一郎著『現代社会学説研究』（1928）からの重訳），「（書評）林惠祥編　台湾番族之原始生活」（1930，第 2 巻第 3 期），「（書評）浅野研真著　社会現象的宗教」（1930，第 2 巻第 3 期），「奢侈生活之社会学的観察」（1931，第 2 巻第 4 期）「（書評）川辺喜三郎的社会学原論」（1931，第 2 巻第 4 期），「（書評）川辺喜三郎的社会学概説」（1931，第 2 巻第 4 期）などである。

(25) 国立南京大学で開催された中国社会学社第 1 回大会（1930 年 12 月 29 日～ 31 日）での潘光旦の発表題目は「家譜と宗法」（30 日午後発表）であった（何逢春，1931，「中国社会学社第 1 次年会記事」『社会学刊』，第 2 巻第 3 期，中国社会学社，pp.1~4）。うえの年会記事は巻末の掲載であるが，当時この雑誌は個々の論文，記事ごとにページがふられているので pp.1~4 となっている。潘光旦（1899~1967）は民国期に，江蘇省政府によって，北京の清華留美準備学校に派遣され，アメリカに留学し，帰国後は上海の大厦大学，暨南大学，滬江大学，中国公学大学部，光華大学など，北京の清華大学，昆明の西南聯合大学など多くの大学の教授を歴任した。建国後は政務院文化教育委員会委員，全国政協第二，三，四回委員にも就いた。1952 年全国の大学，学部調整で，社会学部が廃止された後は北京の中央民族学院で，主として少数民族の歴史研究に携わった。1957 年の反右派闘争では右派分子，1966 年からの文革では反動学術権威とされた。1967 年 6 月，死去。なお，励天予著・星明訳，2013，「新思想の伝播者潘光旦のひとと学問－著名学者潘光旦の生誕 100 年を記念して－」『社会学部論集』第 56 号，佛教大学社会学部，pp.131~145 も参照されたし。

(26) 当時は反右派闘争の真っ最中であり，先立つ百花斉放，百家争鳴期の社会学者による社会学の回復の提起は，党によって資本主義を復壁しようとする陰謀と解されていた。陳樹徳は，李剣華が「社会学随筆」のなかで記述した康生の談話の内容をほぼ引用した後に，この談話がもった影響について「もとより，康生が個人として解釈したひととおりの話は戒めにならないが，注意しなければならないのは，康生は極「左」の政治思想の代表であることである。かれの講話は，当時の政治的情勢のなかで多くの知識人を攻撃，迫害したのみならず，波乱をさらに大きくさせた。さらに深刻なことは社会学という学問を台なしにしてしまって，国家と民族にきわめて大きな損失を与えたことである」と述べている（陳樹徳，1989，中国社会学的歴史反思，『社会学研究』，第 4 期，中国社

会科学院社会学研究所，p.11）。鄭杭生もこの康生について，「当時中共中央で思想理論工作を主宰した中心人物として康生は，・・・社会学と元社会学者に対してさまざまな『でっち上げ』の罪名を強引に押しつけた。批評は公平ではなく誇張され，かつまた建国初期の社会学を廃止した誤ったやり方に対して，条理に合わないことを無理に言い張る弁護を行なった。・・・康生は，実際上，盛んに興りつつあった極「左」政治思想を代表していた。かれの上述の談話はすでの酷く踏みにじられた社会学と元社会学者に対して，まさに災難を重ねさせた。これ以後，20 数年の長きに，社会学は中国の大地で影もかたちもなくなり，社会学は出会うことができない『タブー』になった」（鄭杭生，2001，「中国共産党与中国社会学」，『社会学研究』，第 5 期，中国社会科学院社会学研究所，p.7）と述べ，社会学を廃止したことの大きな理由一つとして，康生の談話をあげている。李剣華，陳樹徳，鄭杭生のいずれも，康生の左寄りの講話と政治運動が社会学の研究と教育，研究機関と大学学部が中国の大地から消えたこと，そして社会学者が右派分子として批判されたことを強調する。しかし，訳者は，社会学が復権，回復した時期に中国社会学の中断を康生一人の言動に帰することはできないと考える。

(27) 呉書松，1995，「懐念李老」（李先生をしのぶ），上海社会科学院社会学研究所編（責任編集呉書松），前掲書，p.43。

(28) 同書『李剣華先生記念集』（1995）には，李の名誉回復について，4 人がそれぞれ「1979 年，党中央の指導者が直接取り組むことによって，名誉回復できた」（p.52），「{1978 年の } 党の 11 期 3 中全会後，社会学が改めて名誉を回復した，無実の罪を受けていた 80 歳の高齢であった李先生も完全に名誉回復を得た」（p.66），「四人組の粉砕後，党中央の関心のものとで，父は長年の冤罪事件が完全に破棄されたが，遺憾なことに父はすでに 80 歳の老人であった。・・・」（p.72）と記述しているが，「“四人組の粉砕後”，とくに党の 11 期 3 中全会後，李夫妻の懸案の処理が，当時の中央組織部長胡耀邦が直接取り組むことによって，まず完全に名誉を回復し，次に党籍と等級が回復した」（p.32）と一人だけが胡耀邦の名前をあげている。

資料 1　李剣華年譜（1900 ～ 1993）

1900 年	8 月 16 日（旧暦）	四川省大邑県悦来場で生まれる。
1920 年	夏	四川省邛崍聯合県立中学卒業。
1921 年	春	日本に留学し，日本大学社会科専攻に入学し，社会学を専攻する。
1925 年		学業を成就して帰国。上海学芸大学教授に任じられる。
1926 年	2 月	安徽公立法政専門学校教授に任じられる。
	7 月	上海法科大学教授。
1927 年	7 月	南京政治工作人員養成所夏期班教官。
	9 月	上海法学院教授，同時に復旦大学，中国公学大学部，上海法政大学，国立労働大学，中国公学など多くの大学で教授や社会学主任を兼任する。
1928 年		『労働問題と労働法』を出版。
同年		引き続いて『労工法論』を出版。
	10 月	孫本文，呉景超らと共同で呼びかけて，「東南社会学会」を創立。
1930 年	2 月	全国的な社会学の学術団体である中国社会学社の学術誌『社会学刊』の編集を担当。
	3 月	三冊目の本となる『社会学史綱』を出版。

1930 年	『社会事業』を出版。
1931 年　秋	『流火月刊』の編集責任者となり，「ソ連の友社」に加入。
1932 年	何思敬らの紹介によって，中国共産党指導下の「上海左翼社会科学者聯盟」に加入。
1933 年 12 月	社聯の機関誌『現象月刊』の編集責任者になったことによって，国民党政府によって逮捕される。
1934 年　3 月	瀋鈞儒，楮輔成らが連名で保証人となり，保釈されて，出所。まもなく，厳希純同志の紹介によって，中国共産党に加入。また，党から派遣されて謝党哉，周恩来，李克農，張唯一，潘漢年の指導のもとで，南京国民党政府の上層部の内部で地下活動に携わった。
同年	前後して，南京要塞砲兵学校，南京憲兵学校で教官。
1935 年	『犯罪社会学』を出版。
1936 年	『監獄学』を出版。
1937 年　春	鉄道部鉄道隊警察総局秘書に任じられる。
8 月	国民党甘粛省政府兼建設庁主任秘書。
1938 年　3 月	軍事委員会政治部秘書。
7 月	湖北省政府秘書に転任。
1939 年　4 月	国際問題研究所指導研究員に任じられる。
1941 年　春	行政院経済会議秘書を兼任。
1943 年　春	社会部労働局処長に任じられる。
1945 年　秋	上海社会局労工処処長，副局長，兼上海失業労働者補導委員会主任および上海市政府員工消費合作社理事長。
1947 年 10 月	第 8 期中国社会学社の監事候補に選ばれる。
1948 年　1 月	国民党上海市政府参事に任じられる。国民党反動派による，労働者の肩をもつ李剣華の影響をさげるための人事である（＊1）。
秋	『大衆夜報』の総編集長に任じられる。まもなく，同済大学法学院教授に転任。
1949 年　7 月	上海市人民政府労働局副局長に任じられる。
1950 年	華東軍政委員会局労働部副部長に任じられる。
1952 年　5 月	「三反」運動のなかで誤って処罰され（＊2），党籍を剥奪されて，労働部副部長を免職され，華東教育部視学，上海高等教育局中等技術教育処の責任者に転任させられる。
1954 年	上海第一医学院教授に任じられる。
1957 年	前後して華東政法学院および上海社会科学院教授に任じられる。
1960 年	上海財経学院教授兼工業経済部主任に任じられる。
1966 年　6 月	文化大革命のなかで，隔離審査（家族や同僚から隔離し，拘束下での審査）を受けて 6 年のながきにわたって迫害された。
1972 年	上海財経学院を免職されて，同済大学図書館での仕事に移動させられる。
1975 年	同済大学を退職。

1979 年 10 月	改めて仕事ができて，中国社会科学院法学研究所顧問を担当（＊3）。
1980 年　1 月	中央紀律検査委員会が改めて審査をした後に，以前の誤った処分を取り消して，党籍および行政等級を回復させた（＊4）。
1980 年　4 月	上海社会科学院顧問兼社会学研究所（準備）責任者に任じられる。
同年	前後して，中国社会学会顧問，上海社会学会理事，上海人口学会理事および上海社会科学院学術委員会委員などに任じられる。
1982 年	『晩晴詩稿』第一集を出版。
1983 年	半江詩画社社長に任じられる。
1984 年	『社会学簡明辞典』を編集長として出版。
1985 年 12 月	中共上海市委組織の批准を経て，副市長級の離休（離職休養）幹部となる（＊5）。
1986 年	『晩晴詩稿』第二集を出版。
1987 年	上海詩詞学会学術顧問，上海法学院校友会顧問，名誉会長に任ぜられる。
1993 年 上半期	『晩晴詩稿』第三集を出版。
1993 年 12 月 23 日	病のため，上海にて逝去。

出典：上海社会科学院社会学研究所編（責任編集呉書松），1995,「李剣華年譜（1900 － 1993）」『李剣華先生紀念集』所収，上海社会科学院社会学研究所，pp.266~268。なお，同書の他の箇所から，事実関係についてのみ，一部の修正および加筆を行なった。

＊1「国民党反動派が全面的な内戦の発動を速め，労働者運動や民主運動に対しする鎮圧も日ごとに激化させた。かれらは，李剣華同志の動労者運動を解決する『えこひいき』の態度に対してきわめて不満であった。まず，栄転にみせかけた左遷というやり方で李剣華を社会局副局長に『昇進』させ，1948 年 1 月にまた市政府参事に転任させた」（「プロレタリア革命戦士社会学家法律家李剣華」，同上，p.5）。＊2 この時の李剣華の罪状は「資本階級生活方式」であった（姜鐸，1995,「声音笑貌宛然如昨－懐念剣老」，前掲書，p.31）。因みに，その時，姜鐸の罪状は「悪辣な支配者地主家族を庇ったこと」であった（同上，p.31）。また，その後 1955 年には潘漢年の冤罪事件の巻き添えにあったし（「プロレタリア革命戦士社会学家法律家李剣華」，同上，p.6），文革でも審査を受け，ショックを受けた（同上，p.6）。＊3 実際には，中国社会科学院法学研究所顧問の仕事は固辞して就いなかったという。呉書松は「1979 年李先生の冤罪案件が無罪になって以後，先生はもともと北京に留まり，中国社会科学院法学研究所顧問を専門に担当することができたが，中国社会学の再建するために，80 歳の高齢を懸念することなく，毅然として上海に帰り，上海社会科学院顧問および社会学研究所責任者（兼）の重責を選んだ」と記している（呉書松，1995,「李先生を偲ぶ」，同上，p.42）。＊4「1979 年党中央の指導者が直接取り組み，冤罪が晴れ，名誉を回復することができた」（同上，p.6），またこれと同じ文章は同書の別の箇所にもあるが，姜鐸は「『四人組』の粉砕後，とくに 11 期 3 中全会の後，李剣華夫妻の処分の年来の懸案が，当時の中央組織部長胡耀邦が直接取り組むことで，まず徹底的に名誉回復を獲得し，党籍と等級を回復した」と，この党中央の指導者が胡耀邦であることを明確に記している（姜鐸，1995，前掲文，p.32）。＊5「離休」は 1949 年以前に革命に参加した幹部の定年退職で，「退休」（普通の退職）より待遇が格段によい。

〔謝辞と付記〕

この翻訳にあたり，2017 年 2 月 24 日に，上海社会科学院で元上海社会科学院社会学研究所研究員，上海社会学会理事であった呉書松先生，同院大学院生の葉雪楓さん，そして仲介の労をとっていただいた同院情報研究所の徐覚哉研究員と面談することができた。呉先生は李剣華先生の晩年の助手をつとめられ，数年前には李先生の遺骨を故郷四川省大邑県にお持ちしたとのことである。葉さんは本訳稿のなかでも引用させていただいた「李剣華：一個社会学家在上海灘的紅色伝奇」の著者であり，徐先生は社会学の回復時前後の情況について話

題が尽きず，大いに話しが盛りあがった。お三人には衷心から感謝申しあげたい。。

李剣華先生は「社会学随筆」のなかでは触れていないが，「三反」運動（1952 年），「潘漢年事件」の連座（1955）では党籍の剥奪，重職の免職，閑職への異動，身を置くだけの小さな家への転居をはじめ，文化大革命（1966 年）では家族や友人，同僚から隔離されて拘束され，酷い処遇を受けている。呉書松先生は李剣華の人柄を次のように述べている。「李先生は虚心坦懐，大局をみて，私利を戒めるひとであった。先生は一生不遇であったけれども，しかしこれまで天を恨みひとをとがめたことはない。わたしは文革中，先生が多くの苦しい思いをしたことを知っている，とりわけ拘禁された時，一人の紅衛兵によって酷く殴られたことがある。文革後，この紅衛兵の単位がそのことに対して，その紅衛兵の処分を行なおうとして，殴った情況を調べようと先生のところへやってきたが，先生は多くを語ることを望まなかった。逆に，この殴った紅衛兵を処分しないように単位を説得した。わたしは先生になぜこのようにする必要があったかを尋ねた。先生はこの紅衛兵がひとを殴ったことはまちがっている，しかし当時の情勢のもとで，若者がこのような誤ったことを行なうことは避けられない，かれがすべておかしいはずがない，ひとには過ちを改める機会がなければならない，とくに若者には，もし処分されたならば，かれの一生はもう可能性がなくなるであろう。・・・先生は 8 級の高級幹部であるがずっと 11 級の幹部の住居に住んだ。先生は副市長級の離休幹部であるが，なんどか入院した時はすべて一般幹部の病室であった」[27]と。李剣華先生はうえにあげたように「三反」（1952 年 5 月），「潘漢年事件の連座」（1955 年），「文革」（1966 年隔離審査）といった政治運動のたびに批判され，冷遇された。その期間は 1952 年 5 月から 1980 年 1 月の名誉回復までの実に 38 年間におよぶ。訳者と四半世紀余り交流を続けている一研究者が，ある最高指導者から李剣華を要職に就けるなという指示があったことを教えてくれた。

李剣華先生は，胡耀邦が直に熱心に対処したことで名誉を回復し[28]，そして胡によって中国社会科学院法学研究所顧問の仕事が按配されたが，それを固辞して上海に戻り，上海社会科学院顧問として上海社会科学院社会学研究所の創立，研究課題の設定，研究人材の養成，図書資料の蒐集などに尽力したのである（一中国人社会学者からの聴取りから）。また，李剣華がマルクス，レーニンおよび毛沢東の著作から引用した箇所については，それぞれマルクス＝レーニン全集，レーニン全集，毛沢東選集の日本語訳を参考にし，引用させていただいたことに深謝いたします。

この翻訳や内容に対して，本学の張萍教授および中国社会科学院博士生指導教授の張琢元教授から指導や指摘をいただいた。記して感謝申しあげたい。

（ほし　あきら　現代社会学科）
2017 年 4 月 1 日受理